

## 「鳥取城の復元について」

懇談会：講演 & 質疑応答

A 本日は鳥取城の復元、保存、整備についてお話いただきたいと思います。先生には本日現場を見ていただきました。経歴については、皆さん方にお渡ししてあると思いますが、特に城郭建築にお詳しい方で、今日、私も先生と鳥取城にご一緒したのですが、いろいろ勉強させていただきました。

今日は先生との懇談会という趣旨ですので、最初に先生から、日本の城郭建築、石垣も含めた城郭建築について30分くらいお話しただいて、それから私たちと先生を囲んで、いろいろなお話をさせていただきたいというふうに思っております。そういうことでよろしく願いいたします。

講師 どうぞよろしく願いいたします。

いま城郭建築に詳しいとご紹介いただいたのですが、そもそも、私の師匠の内藤晶先生は、安土城の復元で非常に有名な方です。その前のもう一世代古い先生は、城戸久先生という、日本で城郭建築の研究を始めた最初の先生です。そういう大先生が名工大にいらっしゃったものですから、近世の建築史をやる一分野として城郭についても研究しているという次第で、とりわけ城郭建築をずっと研究しているというわけではないです。

例えばこの鳥取城に限って言いますと、そもそも鳥取城を最初に建築史の分野で取り上げた先生は、城戸久先生です。城戸久先生が昭和26年に、鳥取城本丸の建築と二ノ丸の三階櫓に関する論文を書かれています。その後、何人かの研究者であったり、あるいは、お城ブームもあって概説書等が増えておりますが、最近に書かれたものと昭和26年に城戸久先生が書かれたものと、研究成果の蓄積があって飛躍的に進んでいるかということ、決してそういうわけではないと思います。

というのは、そもそもこういう城郭をそれまで研究されていた方々というのは、資料と実際の遺構 - - 遺構というのは、建築の遺構と、石垣とか城の縄張

りとかいうものを総合的に判断するものですが、遺構については、明治から今日までにそう大きな変化があるわけではないものですから、遺構についてどうこうということもないということも背景にあると思います。

城戸先生のこの最初の論文というのは、天守が描かれている江戸時代に描かれた絵図や、藩政史に書かれた記録をもとに、天守はこういう建築だった、三階櫓はこういう建築だったということが書いてあります。それをより具体的に知る資料というものが、その後、蓄積されているわけではなくて数は - 確実に増えているのですけれども - 、どの絵図を見てもやはり同じような形に描かれている。精度が同じようなものが幾つかある。その数が増えているというだけで、そんなに新しい研究成果が得られるような新発見の資料というのはいわけであります。

ちょうど明日、名古屋工業大学は百周年の記念式典をやりますけれども、明治38年に大学ができて、その明治期に土屋純一先生という方がいらっしゃって、城戸先生というのはそのお弟子さんで、若い頃に安土城の復元をやったのです。そのときの安土城の復元というのは、「信長公記」という、信長のいろいろなことを書いた記録があって、その記録に文章で描かれている内容をもとにこういうものだということで描いたものです。もちろん、安土山があって、いまほど整備はされていませんが、天守台とか石垣が残っているものですから、そういうものを合わせて安土城の復元をされたわけです。それは戦前の話です。

内藤先生がいまの安土城の復元を発表されたのは昭和49年くらいだったと思います。内藤先生というのは城郭史でも有名なんですけれども、それだけではなくて、近世、安土桃山時代から江戸時代に書かれた大工技術書（当時の大工が書いた建築技術書）の研究をされていて、その資料を得るために日本じゅうを歩いて探しておられたんですね。全国の博物館等を周りながら資料を集めていたわけです。それはお城ということではなくて、大工技術書、建築書を集めておられたわけです。

たまたまそういうものを探しているときに、東京の静嘉堂文庫というところで、巻物になっているお城の平面図で、変な格好をした平面図が出てきたわけ

です。常識的に知っている平面図とは全然違うのですが、その一階部分というか、初層の部分が変な八角形の形をしていて、それが安土城の天守台に非常に近い。これは安土城に関する資料だろうとということになって、その発見があって安土城の復元ができた。その資料は「天守指図」という巻物なのですが、その発見がなかったら、内藤先生はそもそも安土城の復元はしなかつたらうと思います。

そういうことからいけば、鳥取城に、城戸先生が研究されてから以降そのような資料が出てきているわけではないので、飛躍的に進んでいるわけではありません。今後もそういう資料が出てくるとは思えないわけですね。

そういう状況なのですが、鳥取城に限らず、全国的に城下町のシンボルというのはいまでもお城で、それだけ市民の関心や愛着も高くても、いろいろなところで復元の話が持ち上がるんですね。で、いとも簡単に復元、お城ができてしまうところもあるんです。いとも簡単にできてしまうところは、国指定の史跡になっていなくて、何の制限もなく、誰かがおカネを出して、誰かが設計して、誰かがつくれば、できてしまうというようなところが幾つかはある。そんなことでできてしまったところも実際あるんです。

ところが、国指定の史跡になると、例えば石垣が崩れたら、国の文化財ですから、国から補助金を出してちゃんと整備をしましょうと。そういうメリットがある反面、地元の好き勝手に現状を変えるような行為はできないのです。許可をもらわないとできない。いろんなところで復元をしたいという話はしているのですが、文化庁の許可をなかなか得ることができなくて実施に至っていないというのが現状です。

ですから、ここにお集まりの皆さんは非常に関心が高くて、よその事例を多少ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、国からすれば、鳥取城だけをつくる、つくらないという話ではなくて、全国的にお城の復元をしたいというところはたくさんあって、その中で、じゃどこを許可するか。許可をするからには補助金も出すということなんですね。それにはやはり国を納得させるだけのハードルを越えないといけません。

この鳥取城が史跡になったのは昭和32年です。今日いただいた資料を見ると、34年から、毎年のように石垣についてはいろいろ部分的な修理をしているんですね。それは、国が指定したからには、破損を放置しておくといとどんどん崩れてひどくなりますから、それがひどくならない前に早めに手当てをしよう。範囲が広くて、一時期に全体をするということではなくて、部分的にどこかに手を付ける。資料によると、それがほとんど毎年のように行われています。

世界遺産になっている姫路城でもそうです。あそこは、石垣だけではなくて、建物、天守、櫓等、たくさんの建物が指定文化財になっていますが、修理していないところがない。いつ行ってもどこかを修理している、というような状態で順番にやっているわけです。復元行為というのはそう簡単にはさせてもらえないかわりに、史跡として指定したからには、現状維持のための維持・修理を国は認めている。

現状維持というのは、例えば鳥取でもそうですが、要は積み上げていた石をばらばらにおろして、また下から、それが緩んだりほろりしているのを修正しながら、もう一度積み直す。その積み直すときに、同じ石を使えばどうなってもいいという問題ではなくて、なるべく同じ石を同じ場所に戻したい。ほろりしているのはもとに戻しますけれども、位置を変えることなく、もとへ戻したい。同じ石を使う限りはそういうことをしないとできないわけです。

それで、番号をつけて戻したりするわけですが、こういう全国的に石垣を積み直すという仕事をしながら、文化庁も試行錯誤のところがあって、安易に解体してしまって、あとで失敗というようなこともある。それは、丈夫に積み上げればいいというだけではなくて、一たん石垣を解体してしまうと、その裏側の築城技術 - - その石垣を築いた当時の技法というものが一たんそこでなくなってしまうんですね。だからやむを得ずばらして、もう一度組み立てるのですが、そこには過去の情報の多くを失うことになって、修理とはいいながら、一方では破壊的行為をやっているわけです。

それは埋蔵文化財の発掘でもそうですね。順番に発掘していろいろな成果がわかってくる。わかってくるんだけど、それとともに、気づかずに失っ

てしまう情報というのがいっぱいあるわけです。そういうこともあって、現状に手をかけることについては、文化庁は厳しくなっている。ならざるを得ないということです。

例えば鳥取城も、昭和34年からですから、もう45年くらい、部分的な修理をやっているわけですが、天球丸のことは皆さんご存じなのですか？天球丸で石垣を解体して積み合うというときに、思いもよらないものが出てきたというか、古い石垣がその下から出てきて、いま、単に解体して積み直せばいいというだけの問題ではなくなっているわけです。それは、いまのレベルでそういうことに気がついたんですけれども - - 今回、天球丸で初めてわかったんですけど、じゃ40年前に、ほかのところの修理、積み直しをしたときに、同じようなもっと古い遺構があったか、なかったか。何も報告されていないから、なかったということになっていますけれども、本当にそれはそうなのだろうかということが疑問になってきます。

いまの天球丸のいろいろな問題を解決するには、ほかのところはどうだったのだろう。何も手つかずで残っていれば、これから時間をかけてそういうところも調査しながら、新しくわかった事実をもとに修理することができますけれども、過去45年間くらいで修理をしたところは、そういう情報が失われていて、わからない。もうこれは取り返しがつかないということがあります。そういう状況です。

それで、名古屋城は城郭としては国宝に指定された第一号です。国宝というか、昭和4年でしたか、いまの文化財保護法ではなくて、当時は国宝保存法という時代で、国宝保存法になって城郭建築として指定された第一号なのです。天守は姫路城よりはるかに立派な天守で、本丸御殿は二条城の二の丸御殿とほぼ同じレベルです。ですから、二条城と姫路城を足したもの以上のお城だったのです。それが戦災で焼けてなくなってしまった。

戦後の復興期のシンボルとして、これは名古屋城に限らず熊本城もそうなんですけれども、ちょっと日本が元気がよくなってきたときに、城下町のシンボルとして天守を復元する。当時は、外観を復元する、内部は新しい施設として使う

ということが行われました。だから名古屋城にしても熊本城にしても、外観だけは忠実に復元して、内部は全く関係なく、鉄筋コンクリート造で、博物館をつくっています。当時はそれが常識的なつくり方だったのです。

ところが、例えば名古屋城については、鉄筋コンクリートでつくるために、天守台の下に、穴蔵といいますが、地下一階部分に礎石がちゃんと並んでいたのを、その礎石が鉄筋コンクリートの床で覆われてしまうことから、礎石を全部、全く関係のない城内のある地域に便宜上移して、いまはその上に天守が建っているんです。

当時としてはそれはやむを得ない判断で、そういう天守閣をつくったのですが、これも20年ほど前から、本丸御殿をぜひ復元しようという動きになって、今度は木造で - - 天守は高層建築、御殿は平屋の建物ですから木造でもできるのですが、本丸御殿をいまの敷地に復元しようというときに、まあ、失礼ですけども、鳥取城に比べるとはるかに史実に忠実に復元できるのです。

というのは、国宝第一号に指定されて、ちょうど最初の安土城の復元を一緒にやった土屋純一先生という方が、天守の建築にも非常に興味を持たれていて、焼失する前に5カ年計画で、天守も本丸御殿も実測図をつくった。同時に調査目的で、記録の写真をガラスの乾板に何百枚という写真を撮った。それぞれの部屋はもちろんのこと、障壁画とか、非常に詳細に撮った。それと、飾り金具については拓本までとった。ですから、もし復元するとなると、資料的には最も充実していて最も忠実にできる状況にあるわけです。

その名古屋城でさえも、本丸御殿の復元を、20年前から、そのときどきの市長が復元するという方針を立てて、「復元検討委員会」というのもつくて、文化庁の指導も受けながらやるのですが、3年くらいたってくると、この先、委員会を続けてもできないという状態で立ち消えるわけです。で、それから10年ぐらいするとまたそういう機運が盛り上がって、やろうということで委員会を立ち上げるんですけども、それがまたつぶれていく。6年ほど前にも立ち上がって、愛知万博に間に合わせて復元するという話があったのですけれども、それも2、3年前になくなってしまった。

そのときに国の指導を得ながらやるのですが、国としては、本丸御殿を復元したいというのはわかる、資料がちゃんとあるというのもわかる。だけど問題は、それだけではダメです。特別史跡になっているその史跡の範囲内で、御殿だけ復元するなんていうのではダメで、史跡地内全体をどう整備するのか、その全体の方針ができて、その中で復元したいこの建物の位置づけがどうなっているのか、というのを明確にしないといけないというようなことを宿題で言われた。

今年、万博のあとのポスト事業として、また本丸天守復元という話があった。それと、万博のときに名古屋城博というのがあって、名古屋城というのはお城でもっているというか、金の鯨がおりてきただけで2億円ぐらい儲かったんですね（笑）。さわれるというだけで、30分ほど人が並ぶぐらいすごいことになるんです。それで、万博のあと、また復元しようという話になって、当面、いま一番その委員会で問題になっているのは、全体の整備計画をつくった上で、復元する御殿をどう位置づけるか - - そうでないとゴーサインが出ないという状況です。

あるいは、安土城は山全体が特別史跡になっていまして、あそこの場合は、いまから15年くらい前、安土城郭調査研究所という県の施設ができて、天守を復元するなんてことの前に城跡としての整備をどうするのかと。築城から400何十年かたっていて、石垣はかなり崩れるし埋まってしまっている。それと見寺というお寺もあって、通路が変えられたり、いろいろなことがぐちゃぐちゃになっていて、それをどうするのかというので、部分的に調査発掘をして、それから年度ごとにどの部分を整備する。その整備のためのまた発掘調査もやりながらということをして20年計画でやると。15年たって、あと残り5年くらいになって、まだ最初の目論見の半分までいってないんですね。いま考えているのは、前期20年を終えて、今度は後期20年をどう継続していこうかというプランを立てたわけです。

実はそんなに慎重にやっていて、安土城について言えば、天守は華々しく内藤先生の復元案というのがありますけれども、その下のほうの郭がどうなって

いたかなんていうことはわからないところがたくさんあって、いま、それを発掘しながら、新しいことが毎年のように出てくるわけです。手つかずだったのが幸いしているというのがありますが、そのつもりで慎重に調査を行って、新しい事実がたくさんわかってきている。

そういうことからすれば、絵図ではもうあまり新しい資料は出てこないけれども、お城の石垣は、修理にせよ何にせよ、いま埋もれてわからない部分を調査することによって、新しい事実はどんどん出てくる可能性があります。

ですから、いま城郭、お城については、建築史の研究者よりも、考古学をやっていた、中世から織豊期にかけての研究者の研究がむしろ進展している。それは、全国のお城で、石垣の修理なり発掘調査をしながら新しい事実がどんどんわかっていっているという状態です。

ですから鳥取城について言えば、史跡指定になって、これまで継続的に石垣の修理をしていますが、それは本当に積み直すことに専念していて、調査という点ではいままで成果が上がっていないんですね。ですから、これから新しい何かかわかってくるとすれば、やはりお城の発掘なり石垣の積み直し等によってわかってくる。

例えば石垣そのものも、技術的な発達とか、石材の加工法がどうだったとか、いろいろなものが変わってきて、時代によって積み方も変わってくるのですけれども、では鳥取城の石垣全体はどの部分がいつ築かれた石垣か、そういう把握もまだ完全ではないのです。だから、いまはとにかく現状を正確に把握して、そういう研究成果を蓄積した上で全体の整備計画というものをつくって、その中で、例えば門を復元するとか、櫓を復元するとかいうことが、どういう意義があるのかというのを明確にしていかないと国の許可はなかなか下りない。そういうことで、市の人とか、太閤が原委員会委員の皆さんもいまご苦労されていると思いますが、それをやらないことには、いきなりあるものを復元することにはならないですね。

そういうことは既にご存じの方もいらっしゃると思いますが、私が今日伺って、いきなり復元の話というのはやはり難しく、その前の段階のこ



とをこれから積み上げていく必要がある。それも短期間では無理です。これから時間をかけてやりながら進めていかないとはいけません。

そういうことをやったところが、結果的に、例えば津山城は史跡地域内ですね。史跡になっているところで復元できたというのは、これまでの積み重ね、蓄積があってということなんですね。そういうことをこれからやっていって初めて、復元につながると思います。

A いま先生がおっしゃったことは、我々もそれに向けていろいろ勉強しているわけですが、全国のお城、たぶん鳥取城よりも条件がいいところも、皆さん長いこと苦労してやっている。したがって、鳥取城についてはあまり短気を起こさずに、コツコツと長いこと頑張っていて続けてやっていくのが一番だというふうな感じを受けました。

ちょっと私から最初に先生にお伺いしたいのですが、いまおっしゃったように、石垣の構造等の状況がわからないとダメだとしますと、鳥取城というのは、かなり厳しい運命を持っていると思います。熊本城というのは比較的歴史が明らかです。鳥取城というのは何層にわたってできているわけでしょう。その点でいくと、全国のいまおっしゃった中では、非常に難しい部分に入っていると考えるべきなのかというのが一つです。

もう一つは、天球丸のところはどうなっているかを調べるのが石垣を壊すことだということなので、そこを調べるのがまた難しい。論理からすると、全然ブレイクスルーできないのではないかという感じもするわけですね。その2つをとりあえずお願いします。

**講師** 熊本城にしても、程度の差はあるんですけども、一時期にできたものがそのままということはないです。どこのお城に行っても、やはり崩れて積み直しているとかいうこともあるし、崩れかける前に、大きな石垣の前の部分に補強のための小さな石垣をつくる。だから外から見たら、二段上がっていくような形で、それは時期が違うということがある。石垣の積み方によって、こ

の時期の石垣とこの時期の石垣は見るからに違うなあというのはわかったりするんですね。

では、この石垣の積み方というのは、熊本も鳥取も金沢も全国同じかという  
と、決してそうではないのです。それぞれのところで、まずは外から見て石垣  
の積み方が違ふとすると、違いがあったら分類していくんですね。同じお城の  
ここの石垣の積み方とこっちの石垣の積み方が同じだったら、これは同時期だ  
ろうというわけです。そうやって何種類かやっていく。

そうはいうものの、基本的に例えば野面から始まって、打ち込みハギとか、  
切り込みハギとか、だんだん石の加工精度が上がって行って平面的な石垣に変  
わっていきますから、大ざっぱな順番というのはわかっているわけです。そう  
いうことを見当をつけておいて、石垣が崩れたりしたときにそのことを確認し  
ながらやっているのです。

それは金沢城なんかもそうで、金沢城は最近、あれは「金沢城博」と言いま  
したか、「利家とまつ」が流行ったときに建物を復元したんですね。それは史  
跡指定地外で、いとも簡単に復元したのです。それは県がやりたいといって、  
それをやってくれる先生もいて、設計事務所もいて、やったんですよ。

ところが、史跡になっているところはそういうわけにいかない。でも、金沢  
の観光の目玉ですから、県としては今後も継続的にやりたいと考えているわけ  
ですね。そのために、まず調査の組織をつくりましょうということで、金沢城  
調査研究室 - - 正式な名前はちょっと忘れましたが、そういうのをつくったん  
です。それで、建造物部会だとか、石垣部会だとか、考古学部会とか、日本史  
の文献の部会とかいう部会、全国の専門の人からなる委員会をつくった。それ  
もかなり長期的にやっているんです。

私はその建造物部会に所属しているんですけども、単にお城の復元だけで  
はなく、お城を復元するには、当時、加賀藩のつくった建物を全部調べよう  
としています。加賀藩の大工はこういう技術でこんな建物をつくっているとい  
うのがちゃんとわかったら、復元するときにも参考になるだろうと考えられま  
す。だから、いきなり建物を復元するのではなくて、少なくとも江戸時代、城

内にあった建物は全部まず調査しましょうということをやっています。

ちょうど檜谿神社と同じような運命の建物があって、かつて城内に東照宮として建てられた建物が、その後、明治期に移転されて、尾崎神社という神社になっています。それはやはり重要文化財で、名前も完全に東照宮から尾崎神社というのに変わっていますけれども、それは修理だけだったら国から補助金をもらって修復するんですけれども、金沢城のその研究室の研究の一環として、実測図面がなかったものですから、神社の実測図を実測調査をして図面をつくるというようなこともやっています。

そんな周辺のことやりながら、最終的には、お城のすべてのことを洗いざらい明らかにしようとして、非常に長期の計画、膨大な計画を立てて順番にやっています。

A レントゲンで何か見えるとか、そういう新しい技術を適用することはどうですか。

**講師** 石垣の話はそう簡単にフィルムでわかるようなものではなくて（笑）、まずは、外側からの情報でもかなりいろいろなことがわかりますから、外側から見た石垣。それと、分布といっても、崩れかけてちょっと石が見えているような、後に土が漏れてちょっと見えているというようなこともあるものですから、そういうところは、例えば土を一回とってみて、ある石垣面を出してみてもかということもしております。

お城全体にわたって石垣の分布がわかってくると、お城が建てられてからこれまでの履歴がだんだんわかってきます。それはもちろん、間違っていることもあるかもしれないですけども、外から見た状態で、変遷をやって、お城の履歴をある程度つかんでおいて、あとは、石垣を積み直すたびに後ろから新たな事実が見えてくれば、その新たな事実にしたがって修正すればいいだけの話ですから。

ところが、惜しいかな、いままでせつかく40何年間と石垣の修理をやってき

ながら、まだ、史跡地内全体の把握とか変遷とかいうことになると、それがうまくできていないわけです。

A ちょっと10年間くらいお休みの時期もありましたからね。

講師 そんなに簡単に奥のほうのことはわかりませんから、まずは、いま見えているところを正確に把握することが必要です。

B 城戸先生が最も早く手をつけられまして、絵図面のようなものを見たということですが。

講師 こちらに非常に有名な絵図がありますよね。そういうものを何種類か見ながら、天守と三階櫓がこういう建築だったというようなことを考察されております。

B それ以降、特に新しい進歩とか発見がなくて、これから先もちょっとありそうもないということでしょうか。

講師 それは天守について、より詳細な資料がそう簡単には出てこないだろうという話です。

B 絵図面という方法でなく、何か別の方法で構造の仕掛け等がわかるような方法を見つけるのがいいんだと思いますが。

講師 というか、例えば三階櫓を復元しましょうとします。例えばこれはかなり前から調べている資料ですけれども、そこに三階櫓の平面寸法が書かれているようなものがあるんですね。そうすると寸法は正確にわかります。そのわかった寸法で、いま、櫓台の石垣に合うかということ、必ずしも一致しないです。

つまり天守を復元するとなると、それはどこでもそうなんですけれども、限られた条件というか、限られた資料をもとに形につくることは可能なんです。わからないところでも、当時の常識的な組み方だと、こういう構造になりますと類推ができるわけですから、全くできなくはないです。

ただそれは、将来的に、10年後、20年後、50年後に、天守なり三階櫓なり、建築を復元するのにどれだけ正確な資料が出てくるか、その資料が出てこないとできないという話ではないのです。それは50年後だって、いまわかっている資料と同じ程度のものしかないかもしれません。でも、そのときに、個々の建物だけではなくて、石垣全体とか、お城のほかの情報がわかったときには、文化庁はゴーサインを出すだろうという話なのです。

文化庁がゴーサインを出すときに、復元する建物についていま以上の資料がないとダメという話ではないんです。復元するためにいま以上の資料を見つけないとできないということになると、それは非常に難しいことになると思います、建築については。

少なくとも明治12年に取り壊す前の写真、三階櫓や菱櫓や、ああいう写真がありましたよね。その写真は、いまあるものがすべてではなくて、まだ出てくる可能性はあります、ほかの建物についても。まあ、明治12年だから、そんなにたくさんはないでしょうけれども。そういう意味では、写真があるというのは復元するにはいい資料なんですよね。

例えば安土城は、内藤先生の復元案に対して宮上茂隆さんという方の反対の復元案が出てきて、そのどっちととっても、決着のしようがないですね。ところが、三階櫓というのは少なくとも写真があって、中がどうなっているかわからなくても、あのデザインそのものは確実にわかります。そういう意味ではあの建物は非常に復元しやすい。逆に山上の天守の復元だとか、天球丸にあった三階櫓だとか、もう既に江戸時代になくなっている建物、これの復元というのは非常に困難ですけれども、少なくとも写真がある建物の復元というのはかなり信憑性のある復元ができる。

ただ、それを復元する前に、文化庁が許可を出す前に解決しないといけない

宿題は、いま既に出されているだろうと思いますけれども……。

A 石垣とかそういうことですか。

講師 ええ。

C 大変素人っぽい質問で恐縮ですけれども、先生のお話、文化庁の許可を得るためには、全体の史跡そのものの評価が十分でなければ、それはなかなか難しいということですね。そして、建物そのものだけならば、いまのような資料でもできないことはないと思いますが、史跡になっているところの全体、石垣がほとんどでございますけれども、それをこれからクリアするというのは大変なことで、それができないと、一切その上の建物、たった一つの三階櫓にしる、非常に仕事の難しいことになるなあという感じがいたします。

そういうことで現実には、それは文化庁はいろいろ方針もおありでしょうし、それが理想であることは十分わかるんですけど、そうなりましたら、もう何十年先になるのか、あるいは、こういう日本のいまの経済状態からいきますと、半ば諦めなければいけないのかと、素人的にもそんな感じがいたします。

もっと現実的に全体像をクリアにするのは当然ずっとやるべきことですがけれども、いま、我々が切に望んでいるのは、三階櫓と走櫓の辺だけ - - いわゆる鳥取の観光のメッカにもなりますし、非常にその実現は望んでいるわけですし、並行してというわけにいかないものでございませぬか。例えば三階櫓の石垣、非常に熱心に調査をしながら復元をして、おっしゃったように全部、現実的にあまりにも理想に走りすぎて、やっても現実的でないのではないかという気がしますけれども、何かその辺に打開策がないものかなというようなことが率直な感想でございます。

講師 ちょっと私の言い方に誤解があったかもしれません。私は別に文化庁の役人でも何でもなし、私がこうしないと復元はできないということをお言

ているつもりはないのですが、私がかかわっているお城の復元・整備の状況から、文化庁の許可を得るにはこうすると得やすいですよ、というつもりで話そうと思ったのです。そうでないといけないというふうには言ってないんですよ。

つまり、そういうことができたあとでないと復元させないということではないのです。短期間のうちにそんなに調査ができるわけではありませんから、それが終わったあとでないと復元させないということはないと思います。ただ、全国に同じようにお城の復元を希望しているところがあって、それを一遍に許可を出すのではなくて、少しずつ許可を出しています。私は文化庁の人ではありませんが、もしここで早く復元ができるようにするにはどうすればいいかということは考えておく必要があります。とにかく許可をするのは文化庁なので、文化庁の許可をほかのところより早くもらうにはどうすればいいかなという、やはり文化庁が認めるような対策をとらないとダメなんですね（笑）。

その文化庁が認めるような対策というのは、当然、地元の人たちが非常に熱心にやっていて、その方向性も間違っていないくて、全国のお城の復元の模範になるようなところだったら先にやらせてくれると思うんです。そうするにはどうすればいいかという、一方では、そういう全体の整備計画を立てたり、全体の調査というものを地道にやっていく。大抵、文化庁は、お宅はこんなことをやっているけれども、ほかのこういうところではこんなことまでやっているんですよ、あなたのところもこのくらいのことをやらないとそう簡単に許可はしませんよ、と。そういう話なのです。

そういうことから言えば、これも文化庁の人が聞いたら怒るかもしれませんが、写真があるというのは文化庁の人はゴーサインを出しやすいんですね。というのは、文化庁が復元をするというときに - - 文化庁に言わないでくださいよ（笑）。

安土城はたぶん建たない - - どこか別の場所に原寸大の模型として建つことはあるかもしれませんが、あの史跡内に、安土城の天守だけではなくて、その

下のほうの家臣たちの、秀吉の館だとか、家康の館と言われている土地があるんですけども、そういうところに石垣がどんどん出てきて新しい事実がわかっていまして、そこにどんな建物が建っているかというのは、県の研究所のほうでCGをつくってビジュアルでは見えるようにするんですけども、それが建つということはまずあり得ないですね。それは、雰囲気としてはこんなものが建ったということはありません。しかし、確証がない。

ところが、少なくとも写真があれば、中はわからなくても、外観のデザインだけは間違いなく100% - - あの写真を詳細に見ていけば、軒先の瓦が何個並んでいて、窓の格子は何本あってというのが正確にわかりますね。もし絵図だけだったら、出窓と描いてあっても、その出窓のデザインすらわからない。そういうことからすれば、写真があるというのは非常に有力な復元の根拠になるわけです。そういう意味では何十年もしないと復元ができないという話ではないのです。

ただ、ほかの同じように復元を希望しているところより早く実現するために、文化庁はいま全国的に見てこういうことを求めていますから、そういうことを取り組んでいる姿勢を見せたほうが早く復元できますよ、という話なのです。

A 三階櫓の方に注力できないかと思うんですが、一つだけ先生が、三階櫓のところの石垣の強度をちょっと気にしておられました。本当に乗るのかどうかですね。

**講師** 石垣を積み直していますね。あの石垣を積み直すときには、いまの状態で危なくない、自立するということで積み直していますけれども、上に三階櫓を築くつもりで工事をしていないですね。もし、その荷重に耐えられるかどうかということになると、また、ああいうものがちゃんと強度がもつかどうかということは、なかなか難しいですよ。たぶん、最初から上に建物を建てるつもりで石垣を積み直すとなると、単純に昔ながらの工法でやるだけでは済まなくて、もうちょっと地盤の補強を考えてやっただろうと思います。だから、



そうではなくて、そのまま建てられるかどうかというのはちょっと難しいですね。

例えば先ほどお話に出ましたけれども、名古屋城本丸御殿はもっと厄介な話があります。いま、普通に地面があって、その上に礎石が見えているんです。戦災に遇って焼けました。焼けて、その火災の炎で石がかなり傷んでいます。石そのものが、今度柱を建てて割れずに支えられるかどうか。地盤もそうですけれども、そもそも石がその荷重に耐えられるかどうか。じゃ、その石一個を実験でつぶしてみるかということ、史跡だとそういうわけにいかないですね。

史跡の人たちはびっくりするくらい昔のものに過敏です。地面に直接モノを建てることすら嫌っていて、名古屋城の場合、いま見えている旧地盤面はそのまま保護しなさいということになります。礎石が飛び出していますから、いまの地盤面があって、礎石がこう乗っている。その上に柱が本来建っていたんですけど、このまま建てさせない。石が割れる。この地盤面、これが文化財なのに、文化財じゃないものをこの上に建てるわけにいかないといって、どうするかということ、一たんこの上に砂を敷いて平らにする。平らにしたあとで、今度はコンクリートの基礎を前面に打つんですね。基礎を打った上に御殿を復元 - - まあ、それは一つの案ですけれども、これはたぶんこれが一番有力です。

かつて天守を建てる時には、先ほど言いましたように、礎石をどこか別な場所に動かしたんですけれども、それは昭和30年代だから記念物課もそれを許したわけです。いま、とてもそんなことは許さなくて、旧遺構面というのは絶対大事ですから、手をつけてはいかんということになります。

その結果、どんなことが生じるかということ、30年代にできた天守、古天守と本丸御殿とが相対的に高さが変わってくるんですね。数十センチ高さが変わる。広い中で数十センチの高さというのは影響ないみたいですが、要は〔とりあい？〕のところ数十センチずれてくるわけです、すぐ脇のところ。それは全くおかしいことになるのですが、でも、そうでないと建てさせない。

例えば、先ほどの三階櫓をあのまま建てるとしたら、文化庁はたぶん難色を示します。じゃ杭を打てばいいかということ、杭を打てば、さっきのように地面

を傷つけるという話になります。地面そのものが、一回築き直していて、どれだけ昔の遺構を保っているかというのはありますけれども、じゃその下のほうがいいのかとかいうことで、そう簡単に杭を打たせはしないです。

そうすると、そもそもあの上に建てようというときに、いまある石垣が大丈夫なのかどうかということと、建ててもいいようにするには、史跡の指定を受けているところと新築部分とのとりあいをどうするかという、具体的な細かい話というのがまだ出てくるわけです。そういう問題が、復元の方針が決まって復元しようということになったあとでも、非常に技術的な細かい話というのはどんどん出てくる。そういうことをクリアしながらやらないと、簡単に復元というのはできないわけです。

D じゃあ、もう一遍積み直すのか。そうすると、今度、地方負担でいかないとダメとなる。そうじゃないですか。

講師 いえ、それはわかりませんね。これは文化庁の話ですので（笑）、私がそこまで立ち入って、どうなるこうなるということはなかなか言えませんけどね。

E 市のほうでもいろいろ調査をして、記録を残しておられたりとしておられますが、あの石垣は石垣として復元したのであって、三階櫓を上にものせるといふ想定をしてやっていない。だから、もう一遍工夫して組み直してでないといけないということになりますか。

講師 いや、そうとは限らないんですよ。

E みんな復元したいという思いからいろんなことを言うわけです。いま、三階櫓等の復元は難しいので、とりあえずはっきりとわかっている遺構があって、それから橋があって、いわゆる大手門のところから復元していったらどう

かという考え方がある。その遺構はわりとはっきりとしていると。とりあえずいまできるものからかかるという考え方がいいのではないかというので、一つの線が出たわけですね。

**講師** 当然そうです。ですから、例えば三階櫓だけというのではなくて、この史跡の範囲全体を今後どういうふうに計画していくのか。比較的早く整備・復元できる部分もあるだろうし、そういう経験を積みながら、順番としては後回しにすべきものとか、たぶんこれはほとんど復元が不可能だろうとか、何段階かあると思うのです、城内にしても。

**E** もう一つの難問題は、現に施設があるということですね。そうすると、その建造物をどうするか。現にあるということを確認した上で、復元に必要なところを建てて、それを残すのかどうかというような話も出てくると思います。

**講師** 例えば、単なる個人の住宅がその史跡地内にポツポツあるなんていうことであれば、もっと大々的に、昔はこの範囲がお城だったけれども、その後、田んぼになって住宅ができてというので、だんだん変わっていったと。そういうのを、いま残っている部分以外に、だんだん買収しながら - - その買収も、国の補助金をもらって買い上げながら、周辺全体を整備していくという面も、全国で見ると結構あるんですね。そういう全体の計画、将来的にはこんなふうにしたいたいんだという目標のもとに少しずつ進めているわけです。

そういうことからすれば、いまある高校とか県立の博物館とか、ああいうものは、いますぐどうこうしようということではなくて、それこそ長い話なんですけれども、高校そのものの校舎をどうしても全面的に建て替えしないといけないような時期に、そこでもう一度建て替えるのか、また別な土地に建て直すのか。まあ、そういうことになると、お城を保存・整備したいという思いの方だけではなくて、高校に対して非常に深い思い入れのある人たちもいるでしょう。

なかなかすぐに移転かどうかということにはならないとは思いますが、ただ、それも長期の展望として、将来的には、実現するかどうかわかりませんが、移転すべきであったら移転すべきような基本方針としてつくっておく。いつ、そういうことが実現するかはわからないけれども、方針としては立てておくというのはいいかと思います。

もう一つ、仁風閣について言えば、これは移転はあり得ない話ですね。仁風閣については、そもそもあそこは皇太子の行啓のときに建てられた施設で、お城全体を幕末期に整備するとはいいながらも、仁風閣の移転となると、記念物課よりもむしろ建造物課のほうで「移転はまかりならぬ」と言うでしょうね。仁風閣そのものの歴史はあそこからスタートしていますから、それを否定することはできないですね。だから仁風閣はあそこに残ったまま。仮に全体を幕末期の状態に戻すにしても、仁風閣は移転はあり得ない。ただ、西高とか博物館は可能性としてはあるような気がしますね。

A 最後に私から一つ。プラグマティックに考えれば、全国でいろいろなお城復元の計画案があって、それをまず文化庁に申請して、文化庁はそれを受けつけて審査をする。どういうところに問題があるかという形でそれをやっていただいて、その文化庁からの指摘についてさらに検討していくとなると、私たちなんかはわかりやすいですね。

そもそも文化庁は、何が問題かと指摘していただいて、どこを詰めなければいけないか、そもそも全然ダメなのか、そういう形のやりとりがあってくれるとありがたいですね。その辺はどうなんですか。

講師 これも文化庁の弁解をするわけではないのですけれども（笑）、記念物課のスタッフが何人かいて、そういう人が、お城の復元だけではなくて、国宝の整備から、とにかく史跡の整備が全部ありますよね。そういうものが全国からいっぱい来ている中で、最初からそんなに密接に、このこれについてどうしたらいい、いや、ああしたらいいというアドバイスは、なかなか手が回ら

ないでしょうね。

順番にというか、毎年何件かは文化庁はそういうことに許可を出しているわけですね。そうすると、優先順位の高いところから順番に実現していったって、その長い道のりをいろんなところから上っているけれど、そこに近づいてきたら、そういう具体的な話をしてくれるんですよ。まあ、そこに行くまではしようがないですよ。

それは建造物の修理にしてもそうですよね。国指定の建造物にしても、例えば樗谷神社は国の重文ですから、当然、文化庁の補助金をもらって修理をしたいですよ。でも、補助金をもらって修理したいというのは全国からあって、その機が熟すまで、地元から熱心なラブコールを送って、やっと、この修理が終わったからじゃ今度ここにしようかと。まあ、それは県の中での順番もあるでしょうしね。鳥取県の中で、あれが終わったから今度はこちらにしようかと。

F 今後の予定といたしますか、計画、あるいは、文化庁と折衝するやり方については何かご意見をいただけないでしょうか。

講師 それをここで私が言う話ではなくて、例えば、いま言った本丸もそうでしょうし、ほかにも、別な人が言えば、ここを早くやらないといけないではないかというところが、まだお城の中にあるんですよ。そういうものを市のほうでどういう順番にどう整備していくか、ちゃんと案をつくって持って来なさいというのが文化庁のスタンスですね。いま、それをやっているんです。

F そのアンケートの見通しが、それを聞ければ・・・・・・・・。

講師 というよりも、いま、地元でそういう委員会をつくってやっているわけですね。もちろん、昭和何年かにもそういう委員会ができて、そのつど、整備案みたいなものを出していると思うんですけども。

A どちらかというと、いま、市でそれをつくっている最中でして。

講師 いま、つくられているんですね。

A とりあえず、いまつくられているのをつくって、何はともあれまずアクションを起こすということが大切でしょうかね。

講師 例えば地震があつて石垣が崩れたと。それは放っておけないから、災害復旧とかいうことですぐ予算がつくのですけれども、現状維持ではなくて、何か新しいことを補助金をもらってやりたいということになると、地元のプランというものを求めますよね。

A 今回、先生においでいただいたことをきっかけとして、鳥取城の復元と、まちづくりを考える会としても、引き続き、こういういろいろな形で議論をして市にプレッシャーをかけていきたいと思imasuので(笑)、ひとつ、そういう形でよろしく願いいたします。

では、先生、今日はどうもありがとうございました。(了)